新島講座についての報告

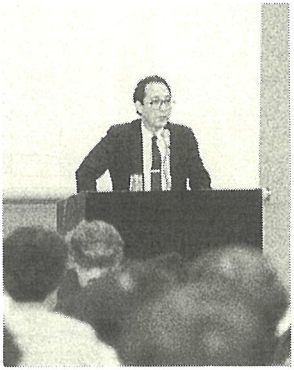
新島講座は、創立百周年記念事業として、新島襄を記念して一九七九年から開設された事業の一つで、立学の精神を基盤として現代にふさわしい教育、研究の幅広い交流を図り、わが国の学術・文化の進展に寄与することを目的としております。

新島講座には、内外の碩学を講師として京都・同志社に招聘して開催しているものと、同志社から講師を派遣して東京に開催の場を設けているものとの二つがあります。

昨年十月五日（土）東京有楽町朝日スクエア　マリオン十一階にて開催しました第十二回東京新島講座並びに、同月の十六日（水）、二十一日（月）の二日にわたり、京都・同志社今出川校地にて開催いたしました第十五回新島講座講演会の講演要旨を記述いたしました。

第十二回東京新島講座

講師　朧谷　寿　同志社女子大学教授
演題　冷泉家の成立
　　―俊成・定家にふれて―
講師　横山卓雄　同志社大学工学部教授
演題　琵琶湖移動説
　　―琵琶湖の生い立ちと今の琵琶湖―
日時　一九九一年十月五日（土）
　　十三時三十分～十六時十五分
会場　有楽町朝日スクエア（有楽町マリオン十一階）
　　東京都千代田区有楽町二―五―一
　　（朝日新聞記念会館内）


朧谷　寿教授

朧谷　寿教授講演要旨

小倉百人一首の撰者として藤原定家の名は余りにも有名である。そして、この定家の典籍の多くを架蔵しているのが冷泉家である。その冷泉家の蔵――御文庫という――が八〇〇年の眠りから揺り起こされた。昭和五十五年四月のことである。そして一年後に財団法人化が認可され、冷泉家時雨亭文庫が設立された。これに先んじて邸宅が重要文化財に指定された。この邸は天明八年（一七八八）の京の大火で焼失し、二年後に再建なったもので、二〇〇年を経過

している。日本最古の公家屋敷である。

定家のときには冷泉家の家名はまだなく御子左家と称した。その兄の俊成は病弱ながら九十一歳という破格の長寿を保ち、『古来風体抄』という歌論書を残した。今回、俊成八十四歳のときの自筆本が発見された（国宝）。また俊成は、七番目の勅撰和歌集である『千載集』の撰者となっているが、子の定家が『新古今集』、その子の為家も勅撰歌集の撰者をつとめ、親子三代に亘るといった稀有な例である。

定家の歌論書『近代秀歌』は二代将軍源実朝に贈ったことで知られる。定家自筆の自撰歌集『拾遺愚草』も見つかった（重文）。

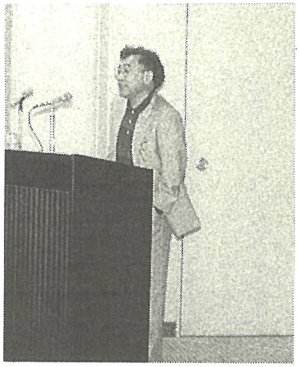
冷泉家を称するのは定家の孫の為相からであるが、この家名成立の背景に大きな事件が絡んでいた。定家の子の為家には嫡子で権大納言に至った為氏がおり、御子左家の財産の多くを譲与していた。ところが晩年になって得た後妻、阿仏尼との間に為相をもうけたことで（六十五歳のとき）、この子を不憫に思った為家は、為氏に与えたものを取り返して為相に与えてしまった。そのことを伝える譲状四通が見つかった。それらには御子左家の動産、不動産をはじめ俊成定家以下の文書・典籍がみえる。そして為家は七十八歳で没した。

為家の死後、為氏は譲与の無効を主張し、取り返しに出た。こうして為氏と阿仏尼、為相との間で訴訟問題が起きた。京都の朝廷では為氏の言いぶんを聞き、為相側は不利に追いこまれ、このままでは失うことになってしまう。そこで阿仏尼はあらゆる困難を覚悟で鎌倉行きを断行した。そのときに書かれたのが『十六夜日記』である。「東の瓶の鏡にうつさば、曇らぬ影もや現わる」ひょっとして鎌倉幕府に訴えれば何とかなるかもしれない、と考え弘安二年（一二七九）十月十六日の夜に京を出発した。為家没後、四年目のことである。阿仏尼はその四年後に没した。しかし、判決は二転三転し最終的に為相が勝訴するのは三十年後のことである。このときに幕府に証拠書類として差し出したのが譲状であった。してみれば、この譲状は京と鎌倉を往復したことになる。阿仏尼の果敢な行動が冷泉家の成立をもたらしたといえよう。

その意味では、為家筆譲状はまさに冷泉家の家宝である。

横山　卓雄教授講演要旨

琵琶湖は、日本最大の湖であるとともに歴史の長さにおいても日本一であり、世界でも有数な湖である。約六〇〇万年という長い年月の間にいろいろな変化をとげ、そ



横山卓雄教授

こに住む動物を育ててきた。現在琵琶湖淀川水系の固有種（ここにしか住んでいない動物）は魚で六種、貝では数十種にのぼっている。

琵琶湖の歴史のなかで、注目されるのは湖が徐々に北～北西に移動していることである。そのスピードは、年間2～3センチにおよんでいるという。この内容は「琵琶湖移動説」として約二〇年前に演者によって発表された。

この講演は「琵琶湖移動」についての科学的証拠を具体的に示すことが中心となった。現在の琵琶湖の地形をみると北湖は「沈降地形」をしている。近江八景で有名な竹生島は、まわりに平地がついていないので水面に島影が写って「沈影」として有名である。沖の白石・多景島などの北湖の島々はみなこのような典型的な沈降地形であり、南湖は両岸に平地がついていて沈降地形をしていない。実は、現在の琵琶湖は年代のちがう三つの湖の水面がつながってできたもので、親・子・孫、三代の堆積盆地で構成されている。南湖は約二三〇万年前に発生し、いまはもう成長（沈降）がとまっている。沖の白石より南の北湖を中湖とよぶことにすれば、中湖は約一〇〇万年前に沈降をはじめている。また、中湖より北の部分の北湖は約三〇万年前に発生し、現在はどんどん沈んでいる。

このようなことは、琵琶湖発生以来つづいていて、全体として水平に約一〇〇㎞におよぶ湖の移動のあとをたどることができる。約六〇〇～五〇〇万年前の琵琶湖は、現在の三重県伊賀盆地にあって、そこのろの近江盆地は山地で川が流れていた。約三五〇万年前ごろになると滋賀県甲賀地域に大きな湖が発生した。これを「佐山湖」という。この湖はやがて日野町付近に移動して約一三〇万年前に消滅した。その少し前に現在の前身が生まれたのである。

第十五回新島講座

第十五回新島講座は、法学部の前身である同志社政法学校開校が一八九一（明治二十四）年九月に開校して丁度百周年に当るため、その記念講演会も兼ねて行われた。

講師　G・エドワード　ホワイト博士
　　米国ヴァージニア大学教授
演題　アメリカ最高裁判所判事
　　オリバー・ウェンデル・ホームズ
　　―金子堅太郎との交流を中心に―
第一回講演会
日時　十月十六日（水）十時四十五分～十二時二十分
会場　同志社礼拝堂
第二回講演会
日時　十月二十一日（月）十三時十五分～十四時四十分
会場　同志社大学神学館チャペル
　　（両日のテーマは共通）

第一回講演要旨

ホワイト博士は、アーモスト大学の卒業生であり、現在ヴァージニア・ロー・スクールの教授として憲法、憲政史などの講義

を担当されている。ホームズ判事、ウォーレン最高裁首席判事、法制史、法思想史などに関する多数の著作、論文を発表されており現代アメリカの代表的な法学者であって、まことに政法学校開校百周年を記念する講座にふさわしい講師である。

講演は二度連続で行われた。釜田泰介法学部長の司会で松山総長挨拶の後、釜田部長により講師紹介がなされ、その後満員の聴衆が見守る中、第一回講演会が始まった。ホワイト博士は明治期の著名な外交官であり、また明治憲法起草者の一人でもあった金子堅太郎（一八五三～一九四二）とホームズ（一八四一～一九三五）の交流を、十九世紀における日本とアメリカの二つのサブカルチャー間の相互交流として考察された。以下にその内容を簡単に紹介する。

金子とホームズの初めての出会いは一八七二年であった。彼らの交流はその後ホームズが九十三歳でこの世を去るまで主として書簡を通じて続くことになる。金子は、明治新政府が「西洋化」のため広く世界から知識を求めるために送り出した岩倉使節団に伴われた留学生の一人としてボストンを訪れていた。彼は師弟関係を重んじ、自覚的に「西洋化」を追求しようとした当時のサムライ階級の一員であった。ボストンにおいて使節団の世話を受け持ったのは、ホームズの父親をはじめとするボストンBrahminの人々であった。彼らはヨーロッパ、特にイングランドの文化を範とする当時の風潮に一石を投じ、アメリカ的な文学、詩歌などの発表を通じアメリカ固有の文化を唱導する人々であった。滞米中に金子は、ハーヴァード・ロー・スクール入学を志し、ホームズにチューターとしての指導を依頼した。

ホームズは法律などの学問的指導のみならず、当時のボストンの社交界にも金子を連れ出すなどしてBrahmin文化との接触の機会を提供し、金子は当時のボストンBrahmin文化を完全に身につけることとなった。しかし使節団の性格上、金子には日本文化をアメリカにおいて理解、浸透させるという意図はなく、Brahminの側にも日本文化を受け入れようとする土壌はなかった。ボストンにおいてホームズは金子を生徒として扱ったが、金子とホームズの関係は金子にとっては師弟関係そのものであった。そして帰国後金子は明治新政府の要職に就き、外交官、枢密院顧問、政策決定者として成功したが、日本人として行動しつつも考え方は常にアメリカ的であり、アメリカに恋こがれ続けたのであった。

第二回講演要旨

ホームズと金子との親交は、金子が岩倉使節団に参加し、ボストンでホームズと出会った一八七二年から、ホームズが一九三五年に九十三歳で死亡するまで、六十年以上の期間にわたった。両者の長年にわたる交換書簡を読むと、二人の親交の性質が先生と弟子という関係であったことが浮かび上がる。二人が出会ったとき、ホームズは上流知識人界でその名を知られる新進の弁護士であった。彼はその後、ハーヴァード

大学教授、アサチューセッツ州最高裁判事、合衆国最高裁判事となりその名声を一層高めてゆく。金子も日本に帰国後、明治憲法の起草作業に参画、農商務相、司法相を歴任し、明治・大正・昭和の三代の天皇に仕える枢密顧問として日本政界の重要人物となって行く。また、金子は日露講和交渉でも、ハーヴァード時代の旧友T・ローズヴェルト大統領とのつながりによって、重要な役割を果たしている。しかし、ホームズと金子の親交には、両者の職業上の地位の変化は反映されず、ホームズにとって金子は旧き良き友であり、金子にとってホームズは偉大なる先生であり続けた。金子がホームズと並ぶとも劣らない日本の重要人物となった後も、両者の関係は、先生と弟子という性質を持ち続けたのである。

この両者の関係は、それぞれの人物の生まれ育った文化的背景抜きには考えられない。ホームズは、父親の代からブラーミンと呼ばれるボストンの上流知識人界の人物であり、自らの思想を世界に伝えることに関心を持っていた人物である。イギリスの政治学者ラスキや、合衆国最高裁判事フランクファータとの有名な交換書簡にも、その人物像が表れている。金子は武士階級の出身であり、明治日本の西洋化の使命を担った岩倉使節団の一員として、五ケ條の誓文にある「知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起」せんとした人物である。ホームズにとって金子は異文化に育った知的興味を惹かれる存在であり、金子にとってホームズは学ぶべきアメリカ文明を代表する人物であったのである。

なお、第二回講演終了後、場所を新島会館に移し、五時から七時まで、「ホームズ判事とアメリカ司法の伝統」のテーマで、学内外の研究者を対象としたセミナーが開かれた。セミナーではホームズ判事に焦点を絞り、政治とは一線を画した裁判官としてのホームズの態度や、文章表現に意を凝らした判決執筆の特徴などについて、ホワイト博士のホームズ研究のより深い一端を披露していただいた。

同志社談叢 第十一号

論文

同志社基督教演説会……本井康博
—一八八一年のキリスト教と仏教—
マッキーン『若い日の新島襄』…北垣宗治
Missionary Herald に最初に載った
新島襄の追悼文……井上勝也
新島襄の大学設立運動（三）……河野仁昭
明治期の岩手県における同志社人たち
……高橋光夫
ブラジルで活躍した小林美登利
……五十嵐勇作
小塩高恒小論—その生涯と思想—…室田保夫
横山松三郎再攷……桑嶋洋一

資料

新島襄に関する文献ノート（その九）河野仁昭
山本覚馬・新島八重文献目録……河野仁昭

（頒価一、〇〇〇円）

発行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課
電話（〇七五）二五一—三〇三七・八